

雌阿寒岳の噴火警戒レベル

— 火山災害から身を守るために —

噴火警報等で発表する

噴火警戒レベル

噴火警戒レベルとは、噴火時などに危険な範囲や必要な防災対応を、レベル1から5の5段階に区分したものです。

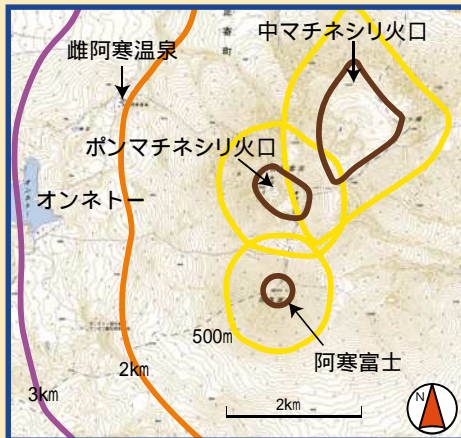
各レベルには、火山の周辺住民、観光客、登山者等のとるべき防災行動が一目で分かるキーワードを設定しています（レベル5は「避難」、レベル4は「避難準備」、レベル3は「入山規制」、レベル2は「火口周辺規制」、レベル1は「活火山であることに留意」）。

対象となる火山が噴火警戒レベルのどの段階にあるかは、噴火警報等でお伝えします。



雌阿寒岳 南西上空から撮影（北海道開発局の協力による）

雌阿寒岳 噴火警戒レベルと必要な防災対応

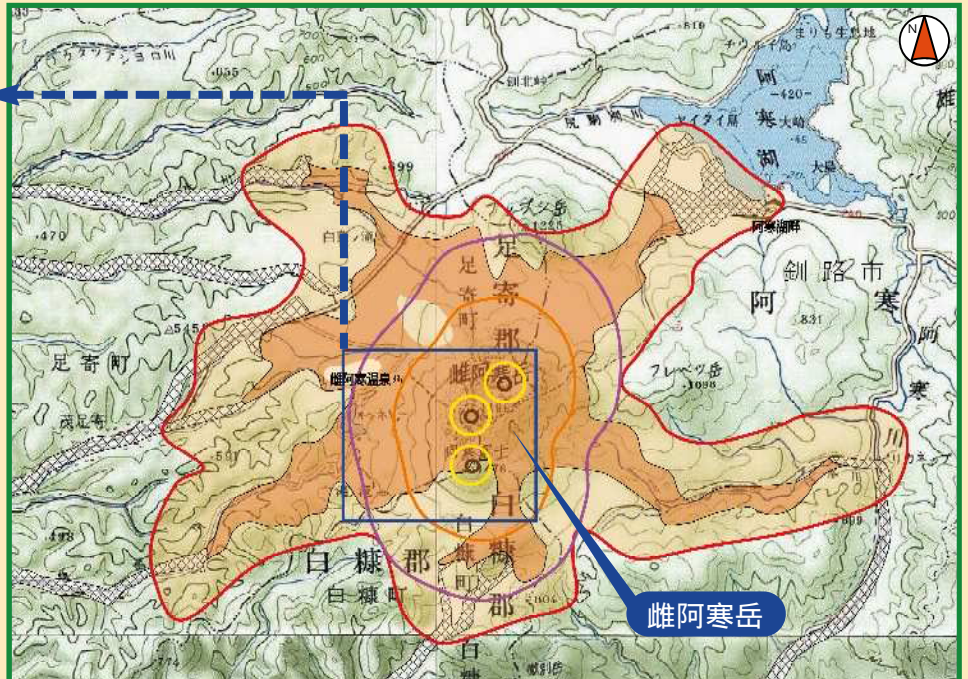


この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「雌阿寒岳」「オンネトー」を使用して作成。

噴火警戒レベルに応じて、下記のような防災対応が必要になります。

各レベルの具体的な規制範囲等については、地域防災計画等で定められていますので、地元市町村にお問い合わせください。

雌阿寒岳の噴火警戒レベルは地元自治体等と調整して作成しました。



- レベル5（避難）： 〇内（積雪期は〇を含む）からの避難
 - レベル4（避難準備）： 〇内（積雪期は〇を含む）での避難準備
 - レベル3（入山規制）： 状況に応じ、各想定火口から約3km以内（〇内）や約2km以内（〇内）の立入規制
 - レベル2（火口周辺規制）： 状況に応じ、各想定火口から約500m以内（〇内）の立入規制
 - レベル1（活火山であることに留意）： 状況に応じ、各想定火口内やその近傍への立入規制
- 〇 想定火口
- 〇 積雪期の大噴火時に、融雪型泥流の影響を受ける可能性がある区域（火砕流と重なる部分は表示を省略）
- 〇 大噴火で火砕流が到達する可能性がある区域
- 〇 火砕流の外側で火砕サージが到達する可能性がある区域
- 雌阿寒岳阿寒町防災から版（平成11年8月）及び足寄町雌阿寒岳防災マップ（平成12年1月）の危険区域予測図等に基づき作成した。

この図は、国土地理院発行の20万分の1地勢図「斜里」「北見」「帯広」「釧路」を使用して作成しています。



本冊子は、植物油インクを使用しています。



札幌管区気象台 地域火山監視・警報センター
 TEL：011-611-2421 <http://www.jma-net.go.jp/sapporo/>
 釧路地方気象台
 TEL：0154-31-5146 <http://www.jma-net.go.jp/kushiro/>
 網走地方気象台
 TEL：0152-43-4349 <http://www.jma-net.go.jp/abashiri/>

雌阿寒岳の噴火警戒レベル

種別	名称	対象範囲	レベル (キーワード)	火山活動の状況	住民等の行動及び登山者・入山者等への対応	想定される現象等
特別警戒報	噴火警戒報(居住地域)	居住地域及びそれぞれより火口側	5 (避難)	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生、あるいは切迫している状態にある。	危険な居住地域からの避難等が必要。	大噴火が発生し、火砕流や積雪期には融雪型火山泥流が居住地域まで到達、多量の軽石や火山灰が風下側の広範囲に堆積、あるいはそのような大噴火が切迫している。 過去事例 約1万2千年前
			4 (避難準備)	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生すると予想される(可能性が高まっている)。	警戒が必要な居住地域での避難の準備、要配慮者等の避難等が必要。	火砕流や積雪期には火砕流に伴う融雪型火山泥流が居住地域に到達するような大噴火の発生が予想される。 過去事例 観測事例なし(約6千年前、約9千年前のような中噴火が発生し、さらに噴火の規模が拡大して大噴火に至る兆候がみられる場合、あるいは火砕流や融雪型泥流の影響が居住地域に及ぶ可能性がある場合)
警戒報	噴火警戒報(火口周辺)	火口から居住地域近くまで	3 (入山規制)	居住地域の近くまで重大な影響を及ぼす(この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ)噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	住民は通常の生活(今後の火山活動の推移に注意)。状況に応じて要配慮者等の避難準備等。登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。	中噴火が発生し、「大きな噴石」が2~3kmまで飛散、火砕流が一部の谷地形に沿い数km流下、積雪期には融雪型火山泥流が発生、軽石や火山灰が風下側山麓に堆積、あるいは溶岩流が流下。 過去事例 約6千年前、約9千年前 小噴火が発生し、「大きな噴石」が2~3kmまで飛散、火山灰等が風下側の山麓に堆積。 過去事例 約400年前、約700年前 ごく小さな噴火(比較的勢いが強いもの)が発生し、「大きな噴石」が1~2kmまで飛散、火山灰等が風下側の山腹~山麓に降下。 過去事例 1959年8月、1956年5~6月 地震増加や地殻変動等により、中噴火、小噴火、ごく小さな噴火(比較的勢いが強いもの)の発生が予想される。 過去事例 観測事例なし
			2 (火口周辺規制)	火口周辺に影響を及ぼす(この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ)噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	住民は通常の生活(今後の火山活動の推移に注意)。火口周辺への立入規制等。	ごく小さな噴火が発生し、「大きな噴石」が火口周辺(約500m)に飛散。 過去事例 2006年3月21日、1998年11月、1996年11月、1988年1~2月等、20世紀中に発生したごく小さな噴火の大半 地震活動や熱活動の高まり等により、ごく小さな噴火の発生が予想される。 過去事例 2006年2月18~20日、3月11~12日:微小地震多発、微動発生 1999年:ポンマチネシリ96-1火口で急激な温度上昇 1996年8~9月:微小地震多発、1987年12月:地震増加
		1 (活火山であることに留意)	火口内等	火山活動は静穏。火山活動の状態によって、火口内で火山灰の噴出等が見られる(この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ)。	状況に応じて火口内及び近傍への立入規制等。	火山活動は静穏。状況により山頂火口内及び近傍に影響する程度の火山灰の噴出等の可能性あり。

注1)本資料中の「大きな噴石」とは、風の影響を受けずに弾道を描いて飛散する程度の大きさのものとす。

注2)大噴火とは、噴煙が火口直上に1万m以上上がり、火砕流が広範囲に流下し、積雪期には火砕流に伴う大規模な融雪型泥流が発生するような噴火。

注3)中噴火とは、噴煙が火口直上に3千~1万mまで上がり、「大きな噴石」が火口から2~3kmまで飛散し、場合により火砕流が谷地形に沿って流下または溶岩流が流下し、積雪期に火砕流が発生した場合には融雪型泥流が発生するような噴火。

注4)小噴火とは、噴煙が火口直上に2千~5千mまで上がり、「大きな噴石」が火口から2~3kmまで飛散するような噴火。

注5)ごく小さな噴火とは、噴煙が火口直上に数百~2千mまで上がり、大きな噴石が火口から数百~2kmまで飛散するような噴火。

この噴火警戒レベルは、地元自治体等と調整の上で作成したものです。各レベルにおける具体的な規制範囲等については、地域防災計画等で定められていますので、関係する地元市町村にお問い合わせください。